

# 生涯學習情報誌

Life Learning

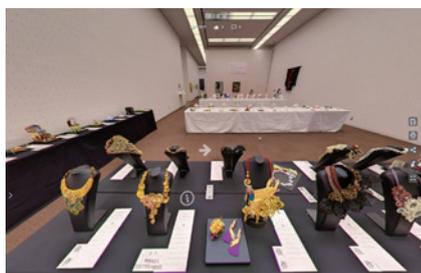
2020  
Aug.  
NO.360



# AJCクリエイティブズコンテスト2020展示

財団後援事業

東京都美術館およびVRミュージアムにて  
主催・AJCクリエイティブズコンテスト実行委員会



会場写真はいずれもWEBサイト上の「VRミュージアム」からスクリーンショット撮影したものです。上位入賞作品には解説や受賞コメントも表示される。  
<https://ajc.jpn.com/>から「VRミュージアム」へ。

財団協賛会員の株オールアバウトライフワークスが実行委員会を運営する「AJCクリエイティブズコンテスト2020」作品展示は、当初3月26日〜30日の間、東京都美術館にて開催される予定だったが、新型コロナウイルス感染症拡大と自粛要請により会期を2日間に短縮、7月の授賞式も中止となった。しかし、実行委員会では360度カメラを活用した「VRミュージアム」を公開。来場できなかった人や海外の人も展示を覧られるようになった。例年同様に財団が後援をし、生涯学習開発財団賞は6作品に授与された。

今回は大賞を始めとするU25(25歳以下)のパワフルな作品の台頭が審査員を驚かせた。また、新設されたミニチュア部門には、日本人の細密な手仕事が行われた作品が多数出品された。

8月1日からは2021へのエントリーも始まった。私たちの日常に不可欠となったツール、「マスクアート」が特別部門として募集される。

〈銀賞〉生涯学習開発財団賞



宮川章子氏  
アートジュエリー部門  
「Shabby bouquet」

〈金賞〉文部科学大臣賞



Junko.trois氏  
アートジュエリー部門  
「アスパラのショール ～美を食す～」

〈金賞〉厚生労働大臣奨励賞



AUN (足立典子 ゆうき慧真) 氏  
ペーパーアート部門  
「知る辺(しるべ)」

〈大賞〉内閣総理大臣賞



小川エドワーズ乃亜氏  
ファブリックアート部門 (U25)  
「I.C.U」

〈銀賞〉生涯学習開発財団賞

ビーズ屋黒猫 村岡淳子氏  
アートジュエリー部門  
「蓮池」  
※図録掲載希望がなかったため、実行委員会が作品を撮影していません。

〈銀賞〉生涯学習開発財団賞



miya氏  
人形部門  
「パリエンス舞踏会へ」

〈銀賞〉生涯学習開発財団賞



山本優佳氏  
刺しゅう部門  
「Backyard 一裏庭一」

〈銀賞〉生涯学習開発財団賞



角田千枝氏  
アートジュエリー部門  
「煌めく初夏の山形」

# 鬼の字び

⑩

## 「ロミオとジュリエット」

作家／出版プロデューサー／劇団主宰

### 鬼塚忠のアンテナエッセイ

コロナ禍真っ只中の今年5月20日に、シェイクスピアの戯曲「ロミオとジュリエット」を現代語で小説化し、上梓させていただきました。これは、光文社が刊行する「小説で読む名作戯曲シリーズ」の中の一冊です。

世の中には、古典の名作と呼ばれる物語が多く存在しますが、実はその中の多くが戯曲なのです。チェーホフの「桜の園」、近松門左衛門の「曾根崎心中」などなど、時代を超え、現代にも通用する物語ですが、それらは舞台になるために書かれた戯曲です。

戯曲は役者を通して、舞台上で物語を表現する形態で、内容は良くても、大掛かりなために、気軽に堪能するにはハードルが高すぎます。また戯曲のまま読むにしても容易ではありません。



●【小説で読む名作戯曲 ロミオとジュリエット】  
(光文社／「小説で読む名作戯曲シリーズ」)  
鬼塚忠(著)  
シェイクスピア原作

中世北イタリアの街を舞台とした、世界一読み継がれる恋物語。「どうしてあなたはロミオなの。モンタギューなんて名前は捨ててしまっ。それが無理なら、わたしを愛すると言って。そうしたら、わたしがキャピュレットの名前を捨てるから」14世紀、北イタリアの街・ヴェローナで、100年を超えていがみ合うキャピュレット家とモンタギュー家。仇どろしの名家にそれぞれ生まれ、一瞬で強く惹かれたロミオとジュリエット。二人の情熱的な恋と、悲しい物語の行方を、小説で味わう。



戯曲の舞台となった北イタリアの美しい街ヴェローナ

会で、テレビの報道番組などで聞く標準的な英語と、下町で話す英語はまったく違います。私がイギリスに滞在していたのは1980年代後半なので、マーガレットサッチャーが首相を務めていましたが、彼女の英語もまた違います。さらにいうと、その頃でさえ、ロンドンのサークルライン(ロンドンの山手線)の中の半分は外国人と言われていたので、彼らは母国語のなまりがはつきりありました。ロンドンではかなり多種多様な英語が使われていました。

話はそれでしたが、さらに面白いことに、このロミオ役ははじめビートルズのポール・マッカートニーを想定していたそうです。ポールはその申し出を断ったそうですが、もし受け入れたら、また違った映画になったのではないのでしょうか。

この映画の一つの特徴が、劇中で頻繁に流れるニーノ・ロータの作曲する音楽です。彼はイタリアを代表する映画「ゴッド・ファーザー」など哀愁漂う音楽を数多く作曲しています。映画のイメージを決定つける音楽を作ったとも言えます。

もしポールが求めに応じて主役を務めていたら、当然のこと、劇中音楽も担当したでしょう。もしそうだと

そこで、これらの戯曲を、わかりやすく現代語で小説化し、できるだけ多くの方々に味わってもらおうという試みがこのシリーズの趣旨です。

この戯曲「ロミオとジュリエット」が初めて世に出たのが1595年とされています。私が2011年に上梓した小説「花いくさ」も日本の戦国時代を描いたので、まったく同じ時期の日本とイタリアを、私は描いたことになりました。何か感慨深い気持ちで作業にあたりました。

さて、このシリーズで、私が小説化した「ロミオとジュリエット」は、もちろんシェイクスピアの創作した物語として有名ですが、私より上の世代には、オリビア・ハッセーの出演する映画を見て、この物語を知り、ファンになった方も多いのではないのでしょうか。

実は、私もまったくその部類の間人で、小説化する作業も、原戯曲を読むと同時に、この映画を何度も繰り返し観て、小説にしていきました。幸いにも、この映画は大まか原作に忠実なので、小説化するのに助けになり

したら、ビートルズの「ミッシェル」のような音楽になったのかなあ、などと考えるのもまた楽しいものです。

美しい英語が話せなかったのは、レナード・ホワイティングだけでなく、実はジュリエット役のオリビア・ハッセーも同じです。彼女はアルゼンチンで生まれ育ち、両親が離婚したため、8歳で母の母国であるイギリスに移住しています。なので英語は完璧ではなかったそうです。インタビューを聞くと、今でも多少、なまりを持つ

ました。というのもシェイクスピアの戯曲はト書きが少なく、情景描写や人物造形などはほとんど書き込まれていません。時代考証を経た映画は情景描写、登場人物の服装などでかなり参考にする事ができました。

この映画の公開は1968年。既に半世紀以上も経ち、私はこの映画は何度観ていますがまったく飽きない。不思議なほどです。

物語が起伏に富んでいること。撮影したイタリアの風景がとても美しいこと。そして、主役の二人、ロミオ(レナード・ホワイティング)とジュリエット(オリビア・ハッセー)が魅力的だからでしょう。この映画がすべての恋愛映画の出発点とさえ言われていますが、納得のいく表現です。

この映画の背景を調べていくうちに分かったのですが、この二人は公開50年目に対談をしています。それが動画サイトで流れていました。そこでこんなことを告白しています。

ロミオ役のレナード・ホワイティングはイギリスのロンドンで生まれ育ち、英語はネイティブなはずですが、プロデューサーに言われ、撮影に入るまでの半年間、英語の発音を矯正するためにあるベテラン俳優の家に住まわされたそうです。彼は下町生まれで、柄の悪い下町の英語(コックニー)は話せても、標準的な英語を話せなかったそうです。日本でいうと、浅草生まれのシャキシヤキ江戸っ子が、標準語をまったく話せないということでしょうか。

私も20代、イギリスのロンドンで2年ほど過ごしたので、このことは肌で感じていました。イギリスは階級社で話しているように聞こえます。私が初めてこの映画を見たのは中学一年の頃の思春期にさしかかろうとする頃で、この映画にとにかく強い刺激を受けました。それは、正直言うと、映画の素晴らしいさと同時に、妖精のようなオリビア・ハッセーが、映画の中で胸をあらわにしたことも理由の一つです。性に芽生える13歳の少年には刺激が強く、心臓が破裂しそうになったことを覚えています。そして、その後、布施明がこのオリビアハッセーと結婚したというニュースが流れてきました。なぜか、軽く嫉妬しました。

まあ、そういった個人的な思い出話はさておき、その後も、この映画はなぜこども記憶に残るのだろうかをよく考えました。名作は、あとあと考えると、現実には絶対あり得ない設定となっていると気づくに至ったのです。ロミオとジュリエットは、13歳と14歳、つまり現代でいう中学一年生と中学二年生。その二人が、出会ったその瞬間に恋に落ち、その夜にベッドを共にし、翌日の午前中には結婚します。そして、その午後にはジュリエットの親戚を殺している。そういう設定です。映画「タイタニック」もそう。「ロッキー」もそう。海外の名作には、現実にはあり得ない話が多い。

私の作品も、たびたび、映画化されたり、テレビ化されたり、舞台化されたりしているのですが、こういう設定の話はプロデューサーにすると、間違いなく、「現実ではあり得ないでしょ。リアリティなさすぎ。荒唐無稽ですよ」と一蹴されるのが目に見えます。「そういう生真面目さがあるから、日本映画はなかなか面白いものを作れないし、世界に出ていけない」と心のなかで思っています。思ったことを素直に口にさせないことこそが、日本人であるのです。

### ●著者プロフィール

鬼塚忠(おにつか ただし) 1965年鹿児島市生まれ。鹿児島大学卒業。大学卒業後、2年間かけて、アジア・オセアニア、中近東、アフリカ、ヨーロッパなど世界40か国を放浪。ヨーロッパでお金を底をつき、シベリア鉄道で帰国。帰国時、所持金は1万円を切っていた。1997年より2001年6月まで海外書籍の著作権エージェント会社「イングリッシュ・エージェンシー」に勤務。映画の原作、ビジネス書、スポーツ関連書籍など年間60点ほどの翻訳書籍を手掛ける。次に海外の作家ではなく、日本人作家のエージェントをしたいと思い、2001年10月にアップルシード・エージェンシーを設立。現在では作家のエージェント会社の経営者であるとともに、作家、脚本家、劇団もしも主宰でもある。著書『風の色』(講談社)2018年映画化。『花戦さ』(角川書店)2017年映画化。日本アカデミー賞優秀作品賞受賞。『Little DJ』(ポプラ社)2007年映画化。『カルテット!』(河出書房新社)2012年映画化。『海峡を渡るバイオリン』(河出書房新社)2004年フジテレビ45周年記念ドラマ化。文化庁芸術祭優秀賞受賞。『恋文讃歌』(河出書房新社)、『僕たちのプレイボール』(冬舎)2012年映画化など多数。

